

【九州国立博物館】(計 25 件)

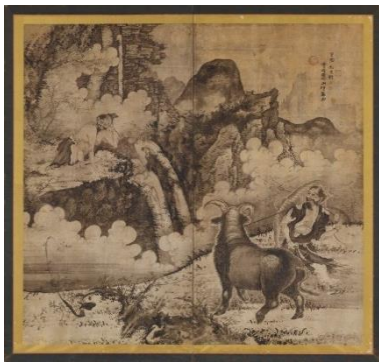
(1) 購入 (25 件)

<絵画> (9 件)

- 1 ○名称 南蛮屏風 (なんばんびょうぶ)
 ○時代 江戸時代・17世紀半ば
 ○品質 紙本金地着色
 ○員数 6曲1隻
 ○寸法等 縦154.8 横348.4
 ○作品概要 日本の港町に黒船と南蛮人が到着する様を描く。その構図や図像は狩野山楽筆「南蛮屏風」(サントリー美術館所蔵)の右隻を踏襲しながら、さらに簡略化が進んでいる。波や人物の顔貌には補筆があるが、その下に見える波を表わす筆線は勢いがあり、手馴れた画家による作例であることを示す。本図は東京国立博物館本や神戸市立博物館B本(談山神社旧蔵本)などの右隻とも共通する。そのため、この構図が禁教・鎖国後も根強く受容され、南蛮屏風の図様が、オランダとの交易の様子を表わす受け皿となっていた可能性を示唆する。
 ○購入金額 65,000,000円



- 2 ○名称 許由巢父図屏風 (きょゆうそうほずびょうぶ)
 ○作者等 曾我蕭白筆
 ○時代 江戸時代・18世紀
 ○品質 紙本墨画
 ○員数 2曲1隻
 ○寸法等 本紙: 縦156.7 横166.0 表具: 縦180.5 横190.0
 ○作品概要 個性的な画風で注目される江戸中期の絵師、曾我蕭白の新作。中国古代の堯帝が許由の噂を聞いて彼に帝位を譲ろうと申し出るが、許由は、「汚らしいことを聞いた」と潁水の流れて耳を洗い、同じ申し出を受けた巢父は、許由が耳を洗うのを見て「汚れた水を牛に飲ませるわけにはいかぬ」と牛を引き返させたという。野卑な人物の表情、独特の目つき、画面のほとんどをうめつくす圧倒的な描写、明暗の強いコントラストが生み出す幻想的なムードは蕭白特有で、強烈な印象を観るものに与える。一方で、極細の墨描や繊細なグラデーションなど細部描写は、抜群にすぐれている。蕭白30~33歳頃の作と推定される。数少ない最初期の力作として貴重。
 ○購入金額 59,400,000円



- 3 ○名称 桃李園夜宴・西園題石図屏風 (とうりえんやえん せいえんだいせきずびょうぶ)
 ○作者等 呉春筆
 ○時代 江戸時代・18世紀
 ○品質 紙本墨画淡彩
 ○員数 6曲1双
 ○寸法等 本紙:(各)縦166.2 横372.0 表具:(各)縦172.0 横386.0
 ○作品概要 四条派の祖、呉春の新出の大作。右隻に唐の李白が催した花見の宴、左隻に宋の文人らが王詠の西園に会した「西園雅集」中、米芾が岩壁に書を認める場面が描かれる。リズムカルな岩や樹木の筆致が躍動感を生み、透明感のある淡い藍・緑・代赭による彩色が華やかさをかもし出している。人物や桌上的器物の細墨線による描写は実に丁寧で繊細。師の与謝蕪村ゆずりの南画風だが、現実味あふれる描写、画面の明るさ、洗練された気品は、呉春の持ち味である。落款の書形や画風から、妻や父を相次いで亡くした傷心を癒すべく池田に移住していた呉春の「池田時代」、30-38歳頃の作と看做せる。最充実期の力作であり、呉春研究上、注目すべき作品である。
 ○購入金額 59,400,000円



- 4 ○名称 地蔵菩薩靈驗記絵巻（じぞうぼさつれいげんきえまき）
 ○時代 鎌倉時代-南北朝時代・13～14世紀
 ○品質 紙本着色
 ○員数 1巻
 ○寸法等 縦36.0 横347.5（第1紙58.2、第2紙58.7、第3紙39.3、第4紙18.1、第5紙59.1、第6紙3.5、第7紙52.2、第8紙58.1）
 ○作品概要 地蔵の靈驗譚をあつめた宋代の常謹撰『地蔵菩薩靈驗記』（端拱2年（989）成立）に収載された説話を絵画化した絵巻物。詞書は原文をほぼ忠実に和文化的なもので、読み下しに近い部分も見られる。本絵巻と同じテキストを典拠とする絵巻物として、群馬・妙義神社本（重要文化財）、東京国立博物館本など鎌倉時代後半の作例が伝存しており、この説話集の絵画化がしばしば行われていたことが分かる。それらと画風や色遣いが共通することから、本絵巻も鎌倉時代後半～南北朝時代の作と推測される。中世における地蔵信仰の隆盛を明らかに示す貴重な遺例であり、かつ鎌倉時代以降の同主題の作例の展開を考える上でも欠かすことができない作品として、その稀少性は極めて高い。
- 購入金額 54,000,000円



部分

- 5 ○名称 出山釈迦図（しゅっさんしゃかす）
 ○時代 南北朝時代・14世紀
 ○品質 絹本墨画
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙 縦80.4 横35.2 表装 縦161.1 横48.1 軸長53.3
 ○作品概要 苦行を終えた釈迦が、修行の場所である山を出る姿を表わす。この主題は成道会の本尊として流布したが、鎌倉・南北朝時代にさかのぼる現存作例は少なく、本図は貴重な初期水墨画の一つに数えられる。僧侶の顔貌など、抑制の効いた的確な描写が見所である。
- 購入金額 20,000,000円



- 6 ○名称 彩釈教三十六歌仙絵断簡 満誓（しゃつきょうさんじゅうろっかせんえだんかん まんぜい）
 ○時代 南北朝時代・14世紀
 ○品質 紙本墨画淡彩
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙：縦28.3 横19.3 表装：縦132.0 横38.0 軸長42.6
 ○作品概要 平安時代、藤原公任によって歌仙36人とその和歌を載せた『三十六人撰』が撰述されると、彼らを特に三十六歌仙として尊び、その絵画化が行われるようになった。本図は三十六歌仙のバリエーションの一つで、僧侶36人を主題とする「釈教三十六歌仙絵」の断簡。東京国立博物館の残欠本（重要文化財）によって、南北朝時代・貞和3年（1347）、真言僧・栄海（1278～1347）が撰じたことが分かる。像主の満誓は、奈良時代、大宰府観世音寺の創建にも尽力した人物。本図を含む「釈教三十六歌仙絵」は、三十六歌仙絵の人気ぶりと受容層の広がりを示す好例である。
- 購入金額 38,000,000円



7 ○名称 花鳥図押絵貼屏風（かちょうずおしえぱりびょうぶ）

○作者等 伊藤若冲筆

○時代 江戸時代・18世紀

○品質 紙本墨画

○員数 6曲1双

○寸法等 本紙：各図 縦127.7 横51.5 折畳時：縦171.5 横64.0 厚11.2

○作品概要 平成28年に新たに紹介された若冲の屏風。各扇に種々の動植物を水墨で描く若冲の屏風が数セット紹介され、中に宝暦9～11年（1759～61、若冲44～46歳）の年記をもつ屏風があることから、本屏風の制作期も若冲40代半ば頃と推定される。85年におよぶ若冲の生涯の中では、ごく早期の作であり、工房作の多い晩年作とは一線を画する。彩色の「動植絵」30幅と同時期の作であり、若冲が着色画と並行し水墨画においても実験的な造形を試みていたことを証する。きびきびとした墨描、独特のシャープな形態、「筋目書き」など斬新な水墨表現など、若冲ならではの造形実験を示す優品で、先行する鶴亭など長崎派や黄檗絵画からの影響も窺える。

○購入金額 54,000,000円



8 ○名称 鳳凰牡丹図（ほうおうぼだんず）

○作者等 孫億筆

○時代 中国 清時代・康熙30年(1691)

○品質 絹本着色

○員数 1幅

○寸法等 本紙：縦67.5 横100.1 表具：縦173.0 横105.3 軸張111.8

○作品概要 中国・清時代に福州（福建省）で活躍した花鳥画家・孫億の比較的早期の基準作。色鮮やかな絵具や金泥を用いて花鳥を細緻に表わす。孫億は福州に留学した琉球絵師の師でもあり、本図は両者の関係を具体的に説明する上で大きな意義を持つ。

○購入金額 8,640,000円

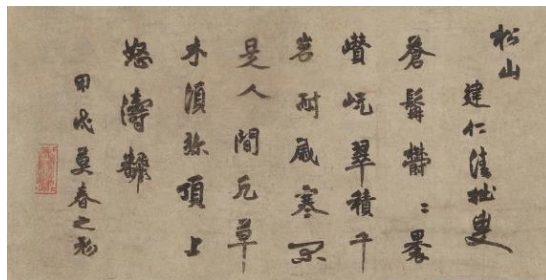


- 9 ○名称 仙山観花図（せんざんかんかず）
 ○作者等 円山応挙筆・高芙蓉賛
 ○時代 江戸時代・安永7年(1778)
 ○品質 絹本着色
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙：縦55.6 横114.3 表具：縦160.0 横133.0 軸張り140.0
 ○作品概要 円山応挙46歳時の大作。賛は、画の6年後、池大雅の親友である高芙蓉が、没する前月に書している。賛では、応挙の水の表現がいかに素晴らしいか、109字を費やして切々と賛美。実際、画中には滝、溪流、蛇行して流れ来る川、近景を横断する幅広の川といった具合に、様々な水の流れが設定され、藍で彩った水面に淡墨で波を丹念に描いて、浅深や緩急など水の変化を見事に表わしている。写生を重視する応挙らしい表現である。近大遠小、近明遠淡の手法を用いた遠近感の表出、安定した絵画空間、雲霞によるゆったりとした空間構成、桃花咲き乱れる中、釣りや軟談する文人たちの精細な描写など、応挙の高度な画技をみせる優れた作品である。
- 購入金額 50,000,000円



<書跡> (5件)

- 1 ○名称 道号偈「松山」（どうごうげ「しょうざん」）
 ○作者等 清拙正澄筆
 ○時代 南北朝時代・建武元年（1334）
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙：縦30.6 横60.3 表具：縦116.0 横72.8 軸長77.4
 ○作品概要 素紙に楷書に近い行書体で、「松山」という道号にちなんだ偈を、中国元時代の禅僧でわが国に渡来した清拙正澄が揮毫したもの。全9行。本体に外題として、江戸時代の大徳寺住持・玉舟宗璠の筆になる題箋「澄拙真蹟／松山頌（白文方印『宗璠』）」が貼られる。その書は、楷書の意が濃厚な行書体で、文字相互で連綿をせず、文字の字間と行間を広めにとり、悠然と紙面に収まる。「岩耐」「是人」の4字は後世の補筆である。「蒼」「寒」の右払い、「不」の特微的な字姿など他の清拙墨蹟と共通し、本作品も清拙正澄の基準作と考えられる。
- 購入金額 16,200,000円



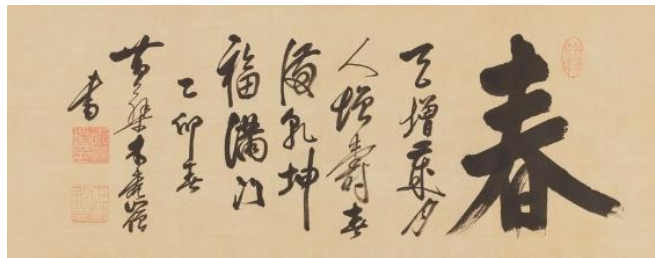
- 2 ○名称 法語屏風（ほうごびょうぶ）
 ○作者等 即非如一筆
 ○時代 江戸時代・17世紀
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 6曲1隻
 ○寸法等 本紙：(各扇)縦49.2 横122.7 折畳時：縦155.3 横62.5 厚10.5
 ○作品概要 即非如一が師である隠元の偈頌を、1紙あたり2行を基調に揮毫し、六曲一隻の屏風の各扇に押し貼したもの。その書は、薄めに磨った墨を筆に含ませ、行草書体を自在に駆使して揮毫する。一例として、第6扇の「月」字の最終画のように素早い運筆で紡錘形をなす筆致は、即非の遺墨に特徴的に見られるが、こうした急峻で歯切れのよい筆致を断続的に繰出しつつ、各行末の収筆の位置が整うなど、即非の高い書技が見てとれる。即非の遺墨で屏風のは珍しく、貴重である。
- 購入金額 3,240,000円



- 3 ○名称 偈頌「春」(げじゆ「しゆん」)
- 作者等 木庵性瑠筆
- 時代 江戸時代・延宝3年(1675)
- 品質 紙本墨書
- 員数 1幅
- 寸法等 本紙：縦97.9 横39.5 表具：縦138.8 横100.9 軸長106.0

「春」字を大書した所謂「置字」の形式で、8行にわたって行草書体で偈頌と落款を揮毫したものの。筆にたっぷり墨をふくませ、起筆に滲みを生じさせながら、勢いよく一気呵成に筆を運ぶ。春がめぐると人は寿命を増し、万物が充実して福が門に満つるという内容で、その書は、大らかさにあふれ、朗らかで明るい書風を展開する。揮毫の目的や背景は不詳だが、木庵の帰依者か黄檗禅の支援者のために書かれた可能性がある。木庵の墨蹟の中でも、天真爛漫で明るい書風を呈する。

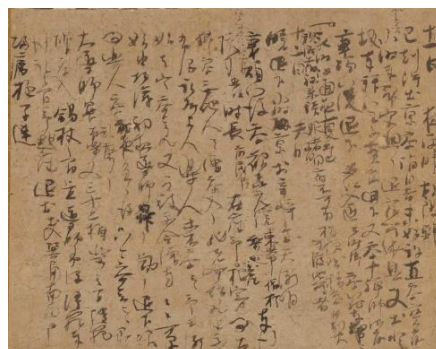
○購入金額 2,200,000円



- 4 ○名称 明月記断簡 建暦三年二月十一日・十二日条 (めいげつきだんかん けんりやくさんねんにがつじゅういちにち・じゅうににちじょう)
- 作者等 藤原定家筆
- 時代 鎌倉時代・建暦3年(1213)
- 品質 紙本墨書
- 員数 1幅
- 寸法等 本紙：縦28.5 横35.4 表具：縦108.5 横47.2 軸張り52.3

『明月記』は、鎌倉時代前期の公卿・歌人で、歌学の大成者として後世に大きな影響を与えた藤原定家(1162-1241)の日記。その建暦3年(1213)2月11日・12日条の自筆本断簡である。11日条は定家の日吉大社参詣についての記録。定家は生涯にわたって日吉社を信奉して盛んに参詣に訪れており、本条にはその具体的な様子が記される。12日条は、定家の歡喜光院仏事への参仕についての記録。歡喜光院は美福門院(1117-60)御願の御堂であり、八条院(1137-1211)に伝領され、建久5年(1194)以降は八条院の御所となった。この院司が定家であった。自筆本である本作品の両日条は、刊本等と一部異同があり、特に11日条については、これまで同年2月10日条として伝わっていたものである。

○購入金額 2,000,000円



- 5 ○名称 紺紙金字法華一品経 普門品 (こんしきんじほけいつぽんぎょう ふもんぼん)
 ○時代 平安時代・12世紀
 ○品質 紺紙金字
 ○員数 1巻
 ○寸法等 本紙：縦26.8 全長282.3 (表紙22.5、第1紙49.0、第2紙51.0、第3紙50.8、第4紙51.1、第5紙48.4、軸付9.5)
 ○作品概要 紺紙金字、卷子装。紺で染めた料紙6紙に銀界を引き、金泥を用いて和様の楷書体で『法華経普門品』を書写した装飾経。本作品は、高野山に伝来した「紺紙金字法華一品経」(和歌山・金剛峯寺所蔵、28巻、重要文化財)から早くに分かれた僚巻で、未指定の「普門品」である。文字は整齊のとれた穏和な楷書で、書風は首尾一貫して乱れがなく、筆者の高い技量が見てとれる。表紙・見返しを荘厳する絵画、題箋・八双・軸首を繊細華麗に装飾する金工技術など、見所にあふれ、平安時代12世紀の多彩な美意識を凝縮した優品といえる。
 ○購入金額 30,000,000円



表紙



見返し

<金工> (3件)

- 1 ○名称 重要美術品 輪宝 (りんぼう)
 ○時代 鎌倉時代・13世紀
 ○品質 銅・鑄造、鍍金
 ○員数 1口
 ○寸法等 径11.6
 ○作品概要 外輪の八方に独鈷杵の先端を突き出した両面式の八鋒輪宝。輪の中心部の車軸にあたる轂は、間弁付きの八葉蓮華形で、八花状を呈する蓮肉には中央に1つ、周囲に8つの蓮子を打つ。轂から放射状に伸びる鋭利な輻は8本からなり、それぞれに花弁と薬を根元にめぐらす。輻の先を受ける輞は、二線の鈕とやや匙面をとった64弁からなる列弁帯であらわし、外縁から輻の先が突出する。全体に鋭く薄手に仕上げられており、鑄上りが極めてよく、鍍金の残りも良好である。同種の現存する輪宝のなかでも最も古様かつ屈指の作である。
 ○購入金額 27,000,000円



- 2 ○名称 重要美術品 五鈷杵 (ごこしよ)
 ○時代 鎌倉時代・13-14世紀
 ○品質 銅・鑄造、鍍金
 ○員数 1口
 ○寸法等 総長18.6 把長7.7 鈷張6.1
 ○作品概要 空海請来組法具に範をとった請来様の五鈷杵。把の中央部は十六面の切子形とし、各面中央にやや大ぶりの円文を打つ。切子形の両端は刻みを縦筋にめぐらして薬をあらわし、鑄を立てた八葉の蓮弁帯は、中央で三条八角の鈕で約す。鈷は独鈷の四方に脇鈷をつけた5本からなり、中鈷は下方に挟りを入れた八面錐形をなす。また、脇鈷は中央には鑄をたて、鑄上3箇所にも月形を設ける。やや白味を帯びた鍍金は厚く細部までまわり、面取りは歪みがなく緊張感がある。請来様法具の展開を知る上で好個の作例である。
 ○購入金額 32,400,000円



- 3 ○名称 五鈷鈴（ごこれい）
 ○時代 鎌倉時代・13世紀
 ○品質 銅・鑄造、鍍金
 ○員数 1口
 ○寸法等 総高17.5 口径7.5
 ○作品概要 鈷・把部と鈴身部を別鑄とする五鈷鈴。鈷は、把上より垂直に伸びる中鈷と、逆刺を伴う4つの脇鈷からなる五鈷形をなす。把の鬼目は二重脣で4ヶ所に鑄出し、鬼目の上下に配した蓮弁帯は、蕊と連珠を伴う間弁付重圈八葉蓮華とし、把上部は素文の2紐で約す。別造りの鈴身部は、笠形上に間弁付重圈八葉蓮華をあらわし、弁先にやや大きめの連珠をめぐらす。また、連珠より下の胴部には、2条の細い隆帯と、その上下に子持三条帯をめぐらす。なお、鈴身の内側には環を設け、舌を吊り下げる。鍍金は剥げが目立つものの、目立つ傷もなく鑄上がりも非常によい。
- 購入金額 5,500,000円



<陶磁> (1件)

- 1 ○名称 色絵象図八角皿（いろえぞうずはっかくざら）
 ○作者等 伊万里（有田）
 ○時代 江戸時代・17世紀中葉
 ○品質 色絵磁器
 ○員数 1枚
 ○寸法等 高4.8 口径26.5 底部4.8
 ○作品概要 口縁と見込の底部を八角形に成形し、高めの高台を付けた色絵磁器。見込に円形の窓を設け、その内側に黒地緑彩で象文をあらわし、その周囲には花文と思われる黄・黒で描いた円形の文様で埋め尽くす。それを囲むように、見込の側面から口縁にかけて、各稜に紫色の牡丹花を中心に唐草を青の上絵具であらわした牡丹唐草文を配する。高台内に呉須の一重圈線を施す。17世紀中葉に作られた伊万里焼の初期の色絵磁器であり、象の文様をあらわした製品の初出の可能性が高い貴重な作品である。山辺田窯または猿川窯の製品の可能性が考えられる。
- 購入金額 16,200,000円



<考古> (4件)

- 1 ○名称 車輪石（しゃりんせき）
 ○時代 古墳時代・4世紀
 ○品質 緑色凝灰岩製
 ○員数 1点
 ○寸法等 長径13.3cm 短径12.6cm 孔径5.8cm 縁高0.7cm 孔内壁高1.1cm
 ○作品概要 車輪石とは、古墳の副葬品の中で、南海に生息するオオツタノハを加工した貝輪を石で模造した腕輪形の石製品で、車輪に見立てて江戸時代に命名された。表面には24本の肋条によって匙面を作り出し、裏面は断面をみると中央に向かって緩やかに膨らむ。石材は硬質で淡緑色を呈する緑色凝灰岩であり、石川県片山津産と見られる。富雄丸山古墳とは奈良市南西部に現存する大型円墳で、明治年間に著しい盗掘にあつて副葬品が散逸した。本品もその一つの可能性もあるが、出土地の確定にはさらなる類品の発見を待ちたい。
- 購入金額 4,500,000円



- 2 ○名称 銅製環珞付経筒（どうせいようらくつききょうづつ）
 ○時代 平安時代・天永元年(1110)
 ○品質 青銅鑄造
 ○員数 1合
 ○寸法等 総高 28.4cm 蓋径 12.0cm 高台径 9.6cm
 ○作品概要 青銅鑄造の蓋付の経筒である。蓋は円形笠形で宝珠形の鈕を持ち、ガラス小玉の環珞を4箇所下垂下する。筒身上半部には14行にわたって銘文が刻まれる。本品は大宰府政庁の北東に位置する信仰の山、宝満山麓に造営された経塚出土品である。当地は山岳信仰を考える上で重要な場所であり、銘文から観世音寺僧「観尊（伝燈大法師観尊）」が奉納したことが分かる。また、経片や経軸、平瓦などが伴っており、石室様の埋経施設を造って炭化物が充填されていたものと考えられる。紀年銘から天永元年（1110）の造営と分かる。
- 購入金額 10,000,000円



- 3 ○名称 三角縁神獸鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）
 ○作者等 伝三重県一志郡美杉村太郎生（現三重県津市美杉町太郎生）出土
 ○時代 古墳時代・4-5世紀
 ○品質 銅鑄造
 ○員数 1面
 ○寸法等 径 21.9cm
 ○作品概要 銅鑄造。内区主文帯に6乳を置き、3神と3獸を交互に配置するが、一部は鑄上がりが悪く不明瞭である。外側の副文帯には9乳を配するが、間隔にばらつきがある。乳間には蛙や双魚、獸を置き、細線で弧文や円文を充填する。本品は、粗雑化したさまざまな特徴から仿製鏡と目される。また三重県美杉村出土とされるが、当地は山間部で古墳は存在していない。しかし、大和と伊勢を結ぶ交通の要衝であり、峠や集落境で行なわれた神まつりに伴う可能性も考えられる。
- 購入金額 1,700,000円



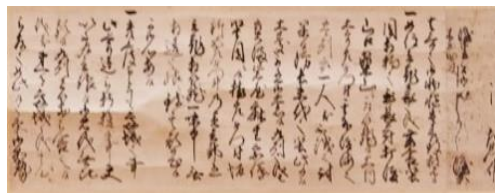
- 4 ○名称 三角縁神獸鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）
 ○時代 古墳時代・4世紀
 ○品質 銅鑄造

- 員数 1面
- 寸法等 径 21.9cm
- 作品概要 銅鑄造。内区主文帯に6乳を置き、3神と3獣とを交互に配置して隙間を細線で充填する。副文帯には10乳を置き、その間に蛙や双魚、獣を置く。いずれの文様も表現がやや崩れ、粗雑な作りで、鑄上がりも悪く不鮮明な部分が認められる。三角縁神獸鏡は、中国の神仙思想に基づく文様をモチーフとした古墳時代前期の鏡であり、文様が精緻で銅質も良いものは舶載鏡、文様の形骸化が進み銅質も悪いものは日本列島で作られた仿製鏡とされている。本品の出土地は不明だが、古墳時代前期後半に日本で製造されたと考えられる。
- 購入金額 3,800,000円

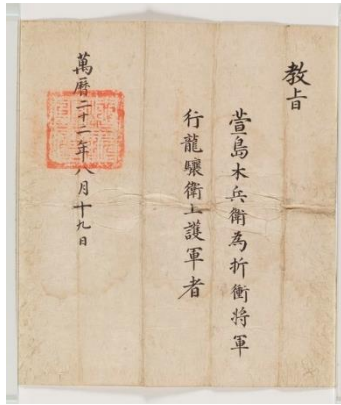


<歴史資料> (3件)

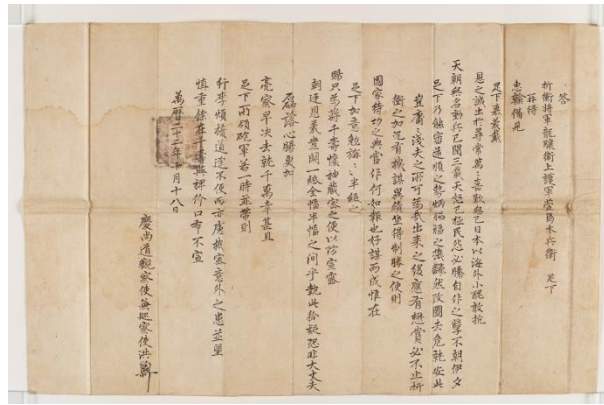
- 1 ○名称 小早川隆景書状 (こばやかわたかかげしよじょう)
- 作者等 小早川隆景
- 時代 室町時代・永禄12年(1569)
- 品質 紙本墨書
- 員数 1幅
- 寸法等 本紙(前半部分):縦13.0cm 横39.0cm 本紙(後半部分):縦13.0cm 横38.6cm 表装:縦146.5cm 横58.0cm 軸長63.5cm
- 作品概要 永禄12年(1569)11月18日付、天野隆重・天野武弘宛、小早川隆景書状。毛利氏と大友氏の立花城攻防、また毛利氏と尼子道臣との出雲を巡る争いに関わる文書である。隆景は兄の吉川元春とともに、筑前の攻略に当たっていたが、大友宗麟の支援を受けた大内輝弘は山口で挙兵、出雲方面では、尼子勝久が大友氏と連携して挙兵した。挟み込まれる形となった毛利元就の命をうけて、元春と隆景は兵を立花城に残して、筑前から撤退することになったことが本作品の背景にある。アジアとつながる国際貿易港、博多を巡る毛利氏と大友氏の攻防が窺える一次史料であるとともに、『大日本史料』等で存在が知られた史料の原文書でもある作品である。
- 購入金額 1,620,000円



- 2 ○名称 重要美術品 朝鮮国告身関係文書 (ちょうせんこくこくしんかんけいもんじょう)
- 時代 (1)(2)(3)朝鮮時代・万暦22年(1594)、(4)江戸時代・慶長17年(1612)、(5)江戸時代・元和6年(1620)、(6)(7)江戸時代・18世紀
- 品質 紙本墨書
- 員数 7通
- 寸法等 (1)縦47.0cm 横41.6cm (2)縦41.2cm 横47.3cm (3)縦52.6cm 横82.7cm (4)縦33.5cm 横51.7cm (5)縦33.2cm 横51.6cm (6)縦38.0cm 横51.5cm (7)縦36.2cm 横7.9cm
- 作品概要 1594年(万暦22・文禄3)に朝鮮王朝が日本人「萱島木兵衛」を朝鮮国の武官に任命する際に発給した文書群((1)・(2)・(3))と、その伝来を示す関係文書群((4)・(5)・(6)・(7))。前者は「文禄の役」の最中に交わされた文書で、中国地方の大名毛利家に従って朝鮮に赴いた日本人武将の動向を伝える。(1)は萱島木兵衛を朝鮮国の武官に任じた告身(辞令書)。(2)は慶尚道觀察使の洪導(履祥)が宋昌世に発した書簡。宋昌世が萱島木兵衛を内通させ、敵情を報告した功績を称える。(3)は洪導が萱島木兵衛の書簡に対して発した返書。(1)は所在不明であったもので、(2)(3)および『朝鮮王朝実録』など周辺史料から歴史的背景が明らかであり、資料的価値は非常に高い。
- 購入金額 68,000,000円



(1) 朝鮮国告示

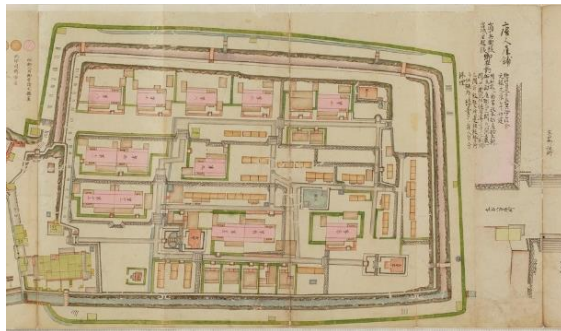


(3) 慶尚道觀察使兼巡察使洪導答書

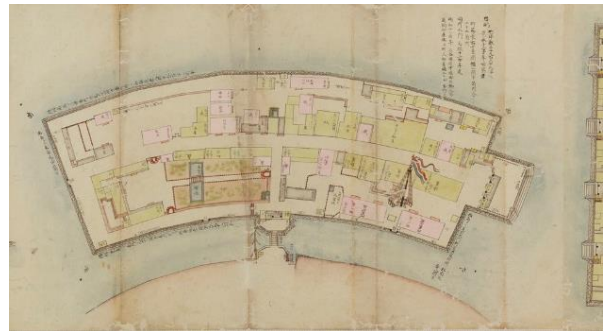
- 3 ○名称 長崎諸役所絵図 (ながさきしよやくしよえず)
- 時代 江戸時代・18-19世紀
- 品質 紙本着色。折帖装
- 員数 1帖
- 寸法等 縦38.6cm 全長1173.0cm 1丁あたり：縦38.6cm 横15.2cm

本紙第1紙：38.1×27.7 第2紙：38.1×27.7 第3紙：38.2×27.2 第4紙：38.3×26.0 第5紙：38.3×26.5 第6紙：38.3×26.5
 第7紙：38.3×27.5 第8紙：38.4×27.7 第9紙：38.2×27.8 第10紙：38.4×26.0 第11紙：37.8×26.0 第12紙：37.7×27.4
 第13紙：37.6×13.5 第14紙：38.1×27.5 第15紙：38.3×25.5 第16紙：38.1×24.8 第17紙：38.3×27.7 第18紙：38.3×27.8
 第19紙：38.3×27.8 第20紙：38.4×24.1 第21紙：38.3×26.4 第22紙：38.3×27.7 第23紙：38.3×27.8 第24紙：38.2×27.7
 第25紙：38.3×27.8 第26紙：38.2×25.7 第27紙：38.3×25.9 第28紙：38.4×25.8 第29紙：38.3×27.7 第30紙：38.3×27.7
 第31紙：38.3×27.8 第32紙：38.2×22.0 第33紙：38.1×25.2 第34紙：38.2×27.6 第35紙：38.2×27.7 第36紙：38.2×22.5
 第37紙：38.2×26.6 第38紙：38.2×27.7 第39紙：38.2×26.3 第40紙：38.2×27.7 第41紙：38.1×27.9 第42紙：38.1×27.8
 第43紙：38.2×27.7 第44紙：38.1×27.8 第45紙：37.9×8.2

- 作品概要 長崎奉行所など主要な建造物の指図を描く。建物名、部屋名、居住者の姓、建物あるいは部屋の間口と奥行き、制札場などの情報が詳細に記されていること、また西御役所以下、設置・建設年代や増築・修理の経緯、総坪数、焼失の年代が記されていることが特徴で、この点に鑑みると、長崎奉行所の普請方が作成したものと考えられる。華美な装飾を排し、貼紙を付すことで変更箇所を示していることを考え合わせると、奉行所の役人が実際に使用するために作成したものであると捉えられる。本作品は、異国との貿易・交流の場であった出島や唐人屋敷・唐通詞会所のみならず、長崎の様々な側面にも光を当てることができる作品である。
- 購入金額 3,780,000円



唐人屋敷



出島